

開催地名：東京都八王子市	
開催日時	令和 5 年 3 月 4 日（土） 14：00 ～ 15：30
開催場所	コニカミノルタ サイエンスドーム（八王子市こども科学館）
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	市内自主防災組織 86 名
開催経緯	本市では、地域住民の防災・減災の意識向上を図るため、自主防災組織の結成や、地域防災リーダーの育成事業、防災講座、グループワーク等を継続的に行っており、地域住民の防災に対する意識向上や女性や子ども目線に立っての避難所運営についても意識向上が感じられるが、被災地での活動等実体験の話を直接聞く機会が少ないことから、自分に置き換え難いことが課題となっている。
	<p>（１）はじめに</p> <p>間もなく東日本大震災が発生してから 12 年を迎える。あっという間の 12 年だったというのが率直な感想だ。皆さんのように、防災・減災に関わる方々が少しでも増えたらいいと思い、震災後も様々な活動を行ってきた。今日は災害時の自助・共助の重要性についてをテーマにお話したいと思う。</p> <p>私が住む仙台市福住町は、仙台駅の東部にある新興住宅地で、2 本の川に挟まれており、水害を受けやすい場所であった。中でも昭和 61 年の台風 10 号による被害は甚大で、その当時の苦い思い出が 2003 年の自主防災組織発足につながり、それが今日の「福住町方式」となっている。「自分たちの町は自分たちで守る」を合言葉に、日本一災害に強い町内会を目指すことになり、できるだけ行政に頼らない地域力、町内をあげての災害対策として進めていった経緯がある。災害発生時に名簿がないと、誰が被災しているかもわからないので、まずは要支援者の名簿作成や住民全員の名簿作成に取り組んだ。</p> <p>また、災害時相互共有協定を締結し、お互いできる範囲内での支援と交流を実施し、互いに防災訓練に参加する等、顔の見える関係をつくっていた。自主防災組織を発足した翌年の 2004 年に新潟中越地震がおきた際に、自分たちでできることがないか検討したうえで、支援金や支援物資を集め、車やトラックで新潟県小千谷市池原地区に向かい、支援させていただいた。</p> <p>（２）東日本大震災時の記憶</p> <p>震災が発生した 3 月 11 日は、被災時を想定した訓練どおりに、要支援者の安否確認を 30 分で終えることができた。普段から 45～50 人ぐらいの要支援者の見守りをしていたので、名簿がなくてもすぐに対応することができた。避難所の開設については、小学校の避難所には 2,000 人近くの避難者が殺到したため立ち後れたが、町内では暗くなる前に炊き出しの準備をし、公園に手作りのトイレや災害時がれき置き場を、訓練どおりに設置することができた。</p> <p>また、発災直後に小千谷市の池原地区の方々が駆けつけてくださり、支援物資をたくさん届けていただいた。小千谷市を含め 4 団体から支援物資をお送りいただいたので、約 8 割相当の物資については、支援いただいた 4 団体の許可を得たうえで、福住町より甚大な被害を受けた海沿いの地区へお届けし、役立てていただいた。</p> <p>（３）その後の地域防災活動</p>

仙台市では、平成 24 年度より地域防災の担い手を育成する目的で「仙台市地域防災リーダー（SBL）養成講習」を開始した。自主防災組織の必要性和重要性が震災によって明らかになったことに拠る。災害の規模が大きいと、行政も大きな影響を受ける。そのような場合には自分たちの町は自分たちで守り、自分の命は自分で守るという強い意識が必要である。

併せて、災害時には女性の視点に立った防災・減災が必要だと強く感じた。これは阪神淡路大震災のときにも言われていたが、避難してくる住民の 8 割が、いわゆる災害弱者と言われる高齢者、障害者、妊婦、乳幼児等という事実から、男性だけで運営するよりも女性のリーダーがいることで、より細かいところまで行き届いた対応が可能となる。東日本大震災をきっかけに、私は仙台市地域防災リーダーの認定を受け、女性のための防災リーダー養成講座を受講し、せんだい女性防災リーダーネットワークを立ち上げ、東日本大震災の教訓と人の命の大切さなどを発信し、人材育成活動やイベント、研修会など、様々な切り口から楽しく防災を学ぶワークショップなどを開催している。女性ならではの視点と、リーダーシップを活かした地域防災力を高める活動を意識している。

福住町の防火・防災訓練では、災害時の対応、減災を「自分たちの町は自分たちで守る」をモットーに毎年訓練している。15 年前から消防署の指導ではなく、福住町独自の企画と運営で、「全員参加型」を目指す防災訓練には、授業の一環として中学生が参加しているのも特徴だ。防災訓練により各自の役割が明確化され、地域の名簿を毎年メンテナンスし、学校の防災教育と地域防災のタイアップにより、地域の発展と防災力向上に繋がっていくことを伝えたい。

また、地域住民が自分ごととして、防災・減災を考えられるように工夫していて、ボランティア活動や夏祭り等、イベントで住民のコミュニケーションの構築を共に図っているのも特徴である。自分の命を守るため、大切な家族を守るために継続していれば、災害が起きた時には必ず役に立つと思っている。

現在、自助・共助・公助の割合は、7 対 2 対 1 だと言われている。まずは自助の力を高めることが必要だ。そして、持続可能な防災・減災の取組みを地域で行い、子どもから高齢者まで総力戦で災害に立ち向かっていただきたいと思う。



開催地より

東日本大震災以前から自主防災活動を実施してきた福住町の取組みについて、具体的な内容をわかりやすく伺うことができた。当市では本日の講演をふまえ、自主防災組織の自助・共助の強化と、防災活動への女性参画について取組を強化していきたいと思う。